



[財]日本太鼓連盟

NIPPON TAIKO FOUNDATION

会報

発行・編集 2004年10月

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル5階

財団法人日本太鼓連盟 理事長 塩見 和子

Tel.03-6229-5577 Fax.03-6229-5580

URL: <http://www.nippon-taiko.or.jp> Email: info@nippon-taiko.or.jp

第8回日本太鼓全国フェスティバル開催

～山形県天童市にて、日本を代表する伝統・創作太鼓9チームが演奏を披露～



(山形県合同チーム 龍童組)

第8回日本太鼓全国フェスティバルが、9月19日天童市市民文化会館にて、満席となる1,200人の観客を集めて盛大に開催されました。

今回は、主催(財)日本太鼓連盟、主管山形県支部、2004太鼓の共演in天童実行委員会で、文化庁のほか、地元の山形県、天童市、天童市教育委員会等の後援をいただきました。

当日は朝から雨模様でした。この時期は稲刈りと重なり、晴れると大勢の方が忙しく、公演を見に来られなくなってしまうため、雨の方が好都合なのだそうです。

開場時間には晴れ上がってきましたが、観客の出足は好調で、早くから多くの観客で会場は埋まり、なかには当日券を求めて早い時間から並ぶ方もいるほどでした。午後2時に観客が見守るなか、主催者側を代表して当財団の紀内会長の挨拶、来賓として遠藤登天童市長よりご祝辞をいただいた後、主管の龍山形県支部長の挨拶と続き、小口副会長の初切り太鼓を皮切りに、いよいよ開演となりました。

全国から選抜された7チーム、そして地元山形県から2チームの総勢121名が一堂に集い、1チーム7分という時間をフルに活用し、それぞれの地域に

伝わる伝統太鼓の特色と工夫を凝らした創作太鼓の魅力が交差する、個性豊かな演奏を披露しました。

プログラムも順調に進み、出場9団体のラストを飾ったのは、山形県合同チーム「龍童組」による「奥州・出羽の轟き」の演奏でした。太鼓の心・技・体を感じさせる豪快なリズムが披露されました。

最後は、財団役員並びに出演者全員が舞台上がり、龍支部長から「纏^{まと}い」が塩見理事長へ手渡されました。その後、塩見理事長の手締めでフィナーレを飾りました。

本フェスティバルが、盛況裡に無事終了することができたのも、2004太鼓の共演in天童実行委員会の皆様、山形県支部の役職員をはじめ会員の皆様、そして出演団体をはじめとする関係各位のお陰と感謝いたします。

来年第9回大会は愛知県で開催

第9回日本太鼓全国フェスティバルは2005年7月20日(水)に愛知県支部主管により開催を予定しています。



(ジュニアコンクール優勝チーム 華太鼓かんなの会「ふじ組」)

第8回日本太鼓全国フェスティバルを終えて

(財)日本太鼓連盟山形県支部

支部長 龍 連山

公演日、当日の朝、起きると外は少し雨でした。「もっと降ってくれば客が入る」と勝手な思いをしていました。と言いますのも当地は稲刈りの時期で、天気が良ければ、会場に来る予定の人も来られなくなるからです。

会場入口に、お客様が開場待ちに並んでいるとの連絡が入り、入口を覗いてみると、最初50人程並んでいたのが100人程に増え、当日券も売れ始めたとの事。「これは入る」と直感しました。「雨ももっと降ってくれ」と願うばかりでした。

この会場で自分は自主公演を15回も行ったのだろうか。何度も利用経験のある場所での本フェスティバル開催ですが、今日までのチケットの売れ行き経過を見ると、手応えは充分ありました。

開演30分前、会場を2階後方入口より恐る恐る覗いてみました。「約6割入った、まだ足りない、頼む早く来てくれ」と願いつつ、舞台に戻り最初の自分の出番を待ちました。そんな中、財団の会長、理事長、小口副会長に「ご苦労さん」と最初に声をかけられても、幕が開いて客の入りを見るまでは正直まともに顔も合わせられませんでした。

開演5分前、舞台上手にある会場モニターを見ました。「約9割、これでよし」「これでみんなに顔向けが出来る」

そして本番。満員の客席を前にして、安堵するとともに、自分のチームに「存分にいけ！」と親指を立てサインを送って全員が確認をしました。演奏は大成功。久しぶりに舞台の快感を味わうことが出来ました。「ありがとう 合掌」

公演は、小口副会長率いる御諏訪太鼓を初め、鼓界トップクラスのドリームチームの熱演で県民の皆さんもパワーをもらい、会員も技術、舞台、礼節を学び、正に素晴らしい血の輸血を受けさせていただきました。

また、今回の最大の課題でありました集客は、スタッフの協力のお陰で、沢山の観客の来場をいただき、無事満席という結果を導くことができました。山形県支部の合同チーム「龍童組」の練習は、選抜された34名が集まり、6月に入りすぐ開始しました。合同12回、個別10回の合計22回も集まって練習し、それにより演奏者の技術は大いに上がり、結束力も強化しました。この事がこのフェスティバルを行うことによる恩恵でもあったと感じました。

山形県支部では、昨年より毎年9月に全国和太鼓の共演開催を目的に、実行委員会を組織し活動しておりますが、すでに来年に向けて始動しております。天童市、県等に県支部を合わせた15団体からなる

実行委員会には、今回も多大なる支援をいただきました。当支部だけではまだまだ力不足ですので、実行委員会は強力な推進部隊です。

最後に機会をいただきました日本太鼓連盟の皆様、みちのく山形までいらして熱演してくれました各チーム、鼓友の皆さん、ご来場賜りましたお客様、誠にありがとうございました。山形県支部会員一同、実行委員会一同重ねて御礼を申し上げます。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。



(フィナーレ)

<出演団体>

- ・龍・連山と和太鼓「龍」(山形県)
- ・助六太鼓保存会(東京都)
- ・富岳太鼓(静岡県)
- ・華太鼓かんなの会「ふじ組」(宮崎県)
- ・手取亢龍太鼓保存会(石川県)
- ・高野右吉と秩父社中(埼玉県)
- ・御諏訪太鼓保存会(長野県)
- ・気仙町けんか七夕保存会(岩手県)
- ・山形県合同チーム「龍童組」(山形県)

以上出演順9団体

第8回日本太鼓全国フェスティバル ビデオ販売のお知らせ

ビデオ購入希望の方は(財)日本太鼓連盟
山形県支部事務局までお問い合わせ下さい。

事務局 龍 寛 氏

Tel. 023-656-9761 Fax.023-656-9762

金額 5,000円(送料、税込み)

*但し、助六太鼓は収録されていません。

スペイン日本太鼓公演

～バルセロナ・マドリッドで文化交流に貢献～

当財団では、9月20日から10月1日までの間、ゆふいん源流太鼓(大分県)をスペインへ派遣いたしました。この公演は、カサ・アジア主催「アジアフェスティバル」に、在バルセロナ日本総領事館より出演要請を受け、バルセロナ、マドリッドにおいて実施したものです。

バルセロナ、マドリッドの2都市で5公演及びワークショップを実施しましたが、いずれの会場においても盛大な声援とスタンディングオベーションという高い評価を受け、総勢2,500名を超えるお客様に楽しんでいただきました。

特にバルセロナで行ないましたワークショップでは、子どもを対象としていたにもかかわらず、大人の参加希望も殺到し、見ている人も手拍子で参加するほどの盛況ぶりでした。

突然のテレビ生出演や取材の依頼もあり、公演の感想が次の日には、スペインからメールで財団事務局に届くなど、現地での太鼓の人気の高さを再認識させられました。



(三本締めのために起立するスペインの観客)

「公演を終えて」

ゆふいん源流太鼓 代表 長谷川 義^{ただし}

今回の公演は、私たちにとっては2回目のスペイン公演になりました。前回は御陣乗太鼓と2チーム合同でしたが、今回は単独公演、それも1時間30分というロングタイム。太鼓の搬入、搬出等、演奏中の太鼓の転換等を考えれば、かなり難しい公演になりそう。スペインの夜は長く、コンサートや演劇は夜9時の開演が通常というお国柄のため、太鼓公演も9時という遅くからのスタート、いくら慣れていても今回は厳しいと思い、事前にトレーニング等万全の体制をとりました。

スペインに着き、久しぶりの気持ちとこれからスタートという気持ちが重なりました。現地では、財団のスタッフは飛び回り、現地スタッフと何度も打ち合わせ。そのお陰で初日から最終日まで公演は大成功。テレビ、新聞等に大きく取り上げられ、事故等の問題もなく、無事帰国できました。

今回のスペイン公演で感じたことは、事前に打ち合わせをしていても現地ではかなりの食い違いがあり、それでも財団スタッフの懸命な努力と私たち打ち手に対する温かい心配りが今回の大成功に繋がっ

たと思います。日本を代表して、また太鼓連盟を代表しての海外公演、皆様のおかげで、また一つ私たち源流太鼓も成長いたしました。留守を守っていただいた皆様とそれを支えてくださった関係者の皆様に感謝いたしまして、公演の報告いたします。



(バルセロナでのワークショップ)

ゆふいん源流太鼓 大島^{みすく} 己直 (14歳)

8月頃にスペイン公演に出場するかもしれないと聞かされて、一瞬頭の中で喜びと不安が交差しました。でも、僕の夢がひとつ叶えられるようにも思いました。僕は小学校2年生のときに太鼓教室に入り、好きなこともあってジュニアから大人の源流の仲間に入りました。これも不安と喜びの交差でした。でも頑張ろうと一生懸命練習しました。

出発に向けて、家族が協力してくれてとってもうれしかったです。

バルセロナに着いて、とうとうヨーロッパに着いたんだなあ実感湧いてきました。公演は、初めての外国の人の前での演奏でとても緊張しました。自分なりに打てたと思います。大勢の観客から温かく歓迎されて本当にうれしかったです。

食事は日本人に合うようにしてくれたので、とてもおいしかったです。気候も大分と変わらず、ほっとしました。観光では、あまり見ることでできない美術画を見ることができて、とても感動しました。

写真でしか見ることができなかったあんな大きな教会も見ることができて、とっても心に残りました。

スペインで塩見理事長から言われたことを忘れず、自分に言い聞かせながらこれからの練習に一生懸命頑張ります。

＜派遣メンバー＞

＜ゆふいん源流太鼓＞

長谷川義(代表)、河野勝己、佐藤貢一、長谷川準、田中俊亮、佐藤豊、大島己直

＜(財)日本太鼓連盟＞

塩見和子(理事長)、中西由郎(常務理事)、秋田稔(事業課長)、松村静香(職員)

ブラジルでの2年間の太鼓指導

前号の「ブラジル日本太鼓公演」の記事において、日本から派遣しました天邪鬼の感想文を掲載いたしましたが、今回は、JICAのシニアボランティアとしてブラジルで2年間指導された小田氏をはじめ、ブラジル太鼓協会、現地の方々から感想文をお寄せ頂きましたのでご紹介いたします。

川筋太鼓保存会 代表 小田 幸久

2001年の春、ブラジル福岡県人会より、国際交流センターの所長を通して、ブラジルで日本太鼓の指導をして欲しいとの相談がありました。最初は、あまりにも遠い地のため断っていましたが、同年の夏、ブラジル福岡県人会会長・矢野ペードロ氏と総務の宗氏そして国際交流センター所長の三人から、改めて懇願を受け、引き受ける事にしました。

一旦話が決まるとブラジル側の動きは早く、JICAを通じてシニアボランティアでとの話がどんどん進んで行き、出発は2002年の7月と決定されました。7月までの間に東京で研修があり、あっという間に出発日となりました。

7月2日サンパウロに到着、中心地パウリスターで現地研修を受け、いよいよ行動開始。受け入れ先のブラジル福岡県人会の役員の方々と今後の事を打ち合わせするが、何の用意も出来ていませんでした。太鼓が無い・練習場所が無い・習い手も無い。何も分からないブラジルで、太鼓の変わりになるものを探すことからのスタートとなりました。

仕方なく山に入り、タイ原産のシャム竹(日本の孟宗竹に近い)を切り出し、竹響を何本も作りました。その竹を使い基本から教えるが言葉が通じない。身振り手振りで指導をするが上手く行かない。日系人といえども三世・四世・五世となると、日本語の分かる人はほとんどいません。私は指導が終わりホテルに帰ってから休む間も無く、ポルトガル語を毎日勉強しました。その努力があっただけ、練習が少しずつ上手く行きだし、朝昼晩一日3回の練習を三ヶ月続ける頃に、なんと、マスコミを通じてブラジル全土より指導申し込みが殺到するという、想像していなかった状況になりました。4団体から新たに12団体を教える事となり、第2期生が誕生したのです。

指導に向かうだけで800～1500kmの広大な道のりで、車、深夜バス、飛行機と乗りわけ、指導先のホテルや役員の家泊めてもらったりと、巡回指導の日々でした。

ブラジルの子供達は素直で、練習熱心で、メキメキと腕を上げていきましたが、ただ練習をするだけでなく目標を持たせるために、1期生の発表会をアルモニアの学校で開催し、大成功に終わることができました。この様子がマスコミに大きく報道され、2期生と同様申し込みが殺到し、3期生が誕生しました。新たな団体も加え合計28団体、一日3回の指導で、休みも取れない状態が7カ月続きました。

指導の合間にJICAに行き、今後のブラジルにおける日本語・日本文化継承について話し合い、太鼓留学制度を取り付けることができましたのは、大きな喜びと励みになりました。

残すところ後半を過ぎようとした頃、財団よりブラジル太鼓連盟設立の相談を受けました。この広大な国でまとまるのだろうかと思う反面、60団体3,500人の生徒が既にいたので、それなりの自信もありました。

まず規約作りから始めましたが、日本語をポルトガル語に訳すのは容易ではありません。次に役員選考については、JICAに後見人を頼み私が運営指導をするということで、2004年2月にブラジル太鼓協会を立ち上げました。一番目の大仕事として、ブラジル和太鼓選手権を開催し、これを毎年開催することとしました。私の二年間の集大成と言うこともあって、寝ても覚めても必死に準備に動き、その結果、1,500人収容の会場に2,000人ものお客が詰め掛け、急遽テレビを備え付けて対応するほどの集客で、大成功に終わりました。

残り数カ月、さあ少し観光でもしようかと考えていましたが、もう一仕事、ブラジル太鼓協会の記念行事を6月に控えていました。行事の目玉として、ブラジルの子供達に本物の日本太鼓演奏を見せることにしました。公演は、それは見事なものであり、どの会場も熱気と興奮で大成功でした。天邪鬼の一生懸命な演奏には、さすがプロの仕業と感心させられました。また、塩見理事長の日本の心、文化についての説明も見事でありました。

最後に(財)日本太鼓連盟、太鼓集団天邪鬼、そしてブラジルでお世話になった方々、本当にありがとうございました。ブラジルの子供達は目を輝かせていました。沢山のお手紙が届いております。また逢える日を楽しみにしています。

「ブラジル太鼓協会」

ブラジル太鼓協会 会長 渡部 一誠

「本当の日本人に会いたかったらブラジルに行け」と言われていましたが、時代の流れとともにその神話も薄れかけ、ブラジル福岡県人会で後継者育成事業の一環として、「和太鼓を通じて伝統的日本の文化を継承する事によって、先輩移住者のご遺徳を顕彰し県人会並びに日系社会の発展に役立てよう」と1998年母県に対し「和太鼓技術指導者招聘」を依頼しました。母県で検討されこの事業は単に県と県人会だけでなく国際協力事業団(JICA)に依頼され事

業団より、シニアボランティアとして2年間小田幸久先生をお迎えする事ができました。幸い小田先生の献身的なご指導、熱心に指導を受ける生徒、サポートする団体役員、又父兄の方々の三位一体の熱意により2月14日ブラジル太鼓協会を創立する事ができました。

そして技術指導者派遣の母体であるJICAサンパウロ事業所より、最初から協会運営に対して物心両面から絶大なるご支援ご協力を頂きました事、重ねてお礼申し上げます。

5月23日第1回ブラジル太鼓選手権大会を開催し、各地方より予選を通過した22チームによって熱演が繰り広げられ、優勝はアルモニア「饗楽座」の頭上に輝きました。

6月にはブラジル太鼓協会設立を記念して、日本太鼓連盟より塩見和子理事長を始め大澤和彦総務部長、助六太鼓今泉豊代表、アメリカ太鼓連盟田中誠一会長、そして太鼓集団「天邪鬼」御一行がブラジルへ来られ、リオ、サンパウロ、マリンガの3カ所において国際太鼓共演大会を開催していただき、本場の太鼓演奏を見せていただいたあの感動は今尚残っております。

塩見理事長は「太鼓は心の音です」また「ブラジルの方はもっと心をこめて打ち込んでください」と教えていかれました。

日本太鼓連盟の温かいお取り計らいに、私たち会員一同身に余る光栄と感謝し心からお礼申し上げます。

生まれただけのブラジル太鼓協会ではございますが、焦らずにゆっくりと、青少年の育成、文化交流を促進し地域社会の活性化を図り、日本とブラジルの親善交流の輪を広げる、という協会の趣旨を達成したいと思っています。ブラジルの大地に足を踏みしめて、日本太鼓連盟をはじめご先輩の方々のご指導を仰ぎながら、日本太鼓の和の精神に基づき、ブラジル太鼓協会を会員の皆様と力を合わせて育てていきます。

今後とも旧に倍してのご指導をお願い申し上げます。今後とも旧に倍してのご指導をお願い申し上げます。

サンパウロ市 矢野百合江(12才)

私はブラジル日本語学校6年生です。日本語学校は、小さい人も大きい人もブラジル人もみんな一緒です。

今から2年ほど前、日本から太鼓の先生が見え、みんな一緒に練習を始めました。太鼓を習い始めてから、とても楽しく大勢のお友達ができました。今でも週に2回水曜日と土曜日に練習をしています。

そしてお祭り、敬老会、運動会、養老院などに演奏に行きます。するとおじいちゃんやお婆ちゃんが太鼓の演奏を喜びます。

又ブラジル人はとても太鼓が好きです。

私たちは初めて日本の太鼓「天邪鬼」の演奏を見てびっくりしました。あのように素晴らしい太鼓が打てるようになりたいと強く心に感じました。日本の皆様よろしくおねがいします。

マリンガ 茂刈 純子(父兄)

私が初めて太鼓と接したのは、息子が一年前に太鼓の練習を始めた時でした。息子はこの一年の間に友達がたくさんでき、日本の文化に興味を示すようになりましたことを母として喜んでおります。私はクラシックが大好きで、そして今流行りのカラオケもやっておりますが、太鼓は人をすごく引き付ける力があることに気づきました。

財団の塩見理事長が「太鼓は心の音です」といわれておりました。人間の心と心のふれあいだと聞いたいろいろな意味と気持ちがわかりました。私の心のリズムも太鼓の音を奏でる皆様と一緒にいたと思いました。

小田先生がいつも言われておりました「日本の本当の太鼓をブラジルの皆様に見せてあげたい」それが現実になって、本当に素晴らしい演奏を見せていただき、とても感謝いたしております。今でも聴いた全ての人の心に響いております。

三味線の演奏も初めて見せていただきました。息子二人、特に長男がとても気に入って、自分でも演奏できるようになりたいと言っていました。でもマリンガやこの辺では三味線を弾いて教えてくれる人も、楽器を手に入れることもできません。そこで息子は、もともとギターが弾けるので、ギターや他の楽器で三味線の音を出そうとしていました。

最後に皆様に移民百周年記念のお祝いの時にまた出会えることを楽しみに待っております。

2回目のピュア・アート・コレクション(富岳会)を日本財団ビルにて開催

9月24日～30日の間、日本財団ビル1階ロビーにおいて、知的障害者による作品展(絵画・陶芸)「ピュア・アート・コレクション」が社会福祉法人富岳会主催のもとで開催されました。展示された作品は、大変素晴らしい色彩、構図で描かれており、非常に見応えがありました。昨年開催した1回目が大好評で、アンコールを受けての2回目の開催でしたが、7日間で約600名の方々にご覧いただきました。絵画を出展された方の中には、太鼓で芸術の才能を開花された方もいらっしゃり、太鼓療育と絵画療育が個人の才能を伸ばし、自立心を高める手助けになっています。

富岳会は、静岡県御殿場市を拠点に福祉活動を展開しており、山内令子理事長をはじめとするスタッフの皆様には、常日頃から当財団の運営及び事業に多大なご協力、ご支援をいただいております。

日本太鼓と学校教育ー⑱

今回は、3名という少人数で協力、分担して13校もの学校に指導を行っている畑忠夫氏(京都府・亀岡武士太鼓 鼓響)より、指導を始めた経緯と今後の課題について寄稿いただきましたのでご紹介します。

「亀岡市における学校太鼓指導の現状」

かめおかさむらい
亀岡武士太鼓 鼓響 代表 畑 忠夫



(園部第二小学校が園部ピートフェスティバルに出演)
経緯 亀岡市は京都市の北西に隣接する人口10万弱の「聖なる水と緑の奏でる知恵の郷」を標榜する、まだまだ田舎の風情がのこる盆地です。ここ亀岡は一昨年には京都府太鼓フェスティバルとジュニアコンクール京都府予選、昨年は支部講習会、今年6月には全国講習会を開催いたしました。いよいよ来年は第7回日本太鼓全国障害者大会を主管いたします。

さて、昭和56年に亀岡青年会議所の社会開発の一環としてスタートした地域起こし運動の「鎮守の森から太鼓の響きの復活」は亀岡市神社氏子総代会の支援のもと市内101社から氏子が集まり太鼓指導が始まり15の地域に太鼓連が誕生し亀岡市太鼓連合会を組織する事が出来ました。昭和62年5月には小口大八先生の門下生となり免許皆伝をうけ全日本太鼓連盟の一員に加えていただきました。平成5年に市太鼓連合会傘下団体の指導者で組織した「鼓響」チームを作り平成12年に京都府太鼓連盟に加盟しました。

学校との繋がりは昭和63年市太鼓連合会の重点方針だった学校での太鼓演奏会の実践に呼応して開催した亀岡市立亀岡小学校での文化鑑賞としてのミニフェスティバルでした。終了後障害児学級での太鼓指導の要請を受け授業の中での指導が始まりました。

翌年には児童自立支援施設京都府立淇陽学校、その後は市内の市立保育所、幼稚園、養護学校など指導要請が来ました。しかし平日の授業時間に出来るメンバーは限られ、平成4年から教員対象太鼓指導者研修会を市教育委員会の後援を受け、週1回10回シリーズで開催し指導者育成をはじめましたが、18小学校、8中学校の学校長の理解を得るのが難しく苦慮しました。中途半端な指導者しか養成できず現在も私と市太鼓連合会会長藤本邦雄氏、京都府太鼓連盟理事木村純次氏の3人が手分けして

13校20クラスを指導しています。この中には亀岡市のみならず隣町園部町教育委員会の要請で、園部町内小・中学校へも指導に行っています。尚、教員対象研修会も従来から実施しており本年度も夏休み中に行いました。

平成16年度の指導校は亀岡市一小学校障害児学級6校、中学校(選択教科)2校3クラス、小学校クラブ2校、園部町一小学校2校3クラス、中学校(選択教科)1校、小学校クラブ2校、PTA2校、児童自立支援施設1校、合計13校20クラスです。

課題 45～50分の授業時間では、ストレッチや整理体操にも時間を割かれ、曲の途中で授業終了により波に乗れず、一週空くとまたははじめからの繰り返し連続です。隔週実施の2時間授業も要請しましたが選択授業の太鼓だけ2時間連続はできず、現在は5時間目の前の昼休みを15分もらって60分授業に、また6時間目は後ろに30分超過。しかしそれ以外の時間帯は不可能な状況にあります。

また私どもの身分については亀岡市教育委員会には社会人講師として認定されていますが、府教育委員会には認定されていません。教師の人事は府の担当ですので、認定するよう働きかけています。もし認定できない場合は、教員資格を持つ教師が指導すべきだと思っております。そこで学校長の理解とお墨付きを得た教員対象指導者塾を週1回～2回夜間開催し、技術認定員3級以上を目指す教員を養成し、我々はバックアップに回りたいと思っております。

ボランティアでは限界がありますが太鼓が好きで月から土曜まで走り回っています。日本太鼓教本はフルに活用し重宝しています。

紙面の都合上指導内容を掲載できませんでしたが、また機会があれば紹介いたします。



(障害児学級児童による演奏が新聞に掲載)

富山県で初めての支部講習会を開催

第21回日本太鼓支部講習会が8月28・29日の両日富山県氷見市において行われました。

講座は、3・4・5級基本講座が設けられ78名の受講生が参加しました。

○基本講座

3級基本講座	(講師 安江 信寿氏)
4級基本講座	(講師 若山 雷門氏)
5級基本講座	(講師 松枝 明美氏)

○技術認定員検定の結果は次の通りです。

3級検定	12名受検	12名認定
4級検定	16名受検	16名認定
5級検定	50名受検	50名認定



(3級基本講座)

3,651名が資格を取得

2004年10月現在の公認指導員・技術認定員数は以下の通りです。

<公認指導員>

特別2名、1級22名、2級54名、3級103名、
総数181名

<技術認定員>

1級44名、2級86名、3級372名、
4級661名、5級2,309名、総数3,472名

各種会議を開催

<代議員会>

第8回代議員会が7月2日(金)に開催され、次の事項が審議、承認された。

1. 「2003年度事業報告」について

資料を基に説明を行い、特に異議無く了承された。

2. 「2004年度事業計画について」

事業の実施内容並びに収支予算について説明を行い、特に異議無く了承された。

3. 「支部事業並びに支部会計の明確化について」

資料を基に説明を行った。

4. 「支部の開設について」

北海道道北支部の開設について資料を基に説明を行った。

5. 「公認指導員更新研修会について」

第2期公認指導員更新研修会の開催結果、及び欠席者に対する資格喪失、降格、停止等について資料を基に説明を行った。

6. 「教職員太鼓研修会について」

「教職員太鼓研修会実施の手引き」の資料を基に説明を行い、次の事項が審議、承認された。

- ・指導は公認指導員に限定する。
- ・教職員の募集方法について質問があり、昨年群馬県で行った方法が紹介された。
- ・海外派遣チーム選考について質問があり、1時間以上の演奏が可能、且つ最低1週間以上の派遣となるためその間欠勤可能なことなどの条件が説明され、了承された。

<技術委員会>

第18回技術委員会が7月9日(金)に開催され、次の事項が審議、承認された。

1. 「日本太鼓技術普及事業について」

①第2期公認指導員更新研修会の結果について資料を基に説明を行った。

②公認指導員の昇級並びに認定について

現3級公認指導員の高島奈々氏を2級公認指導員に、現1級技術認定員の堀多栄子氏を3級公認指導員に認定した。道南支部より推薦のあった太田義高氏を2級公認指導員に認定し、櫛引秀明氏と道西支部より推薦のあった田中浩照氏をそれぞれ3級公認指導員に認定した。

③2004年度日本太鼓全国講習会について

資料を基に説明を行った。

④教職員太鼓研修会について

事務局にて指導要領を取りまとめ作成することとした。尚、参加した教職員を5級技術認定員、2回参加した教職員を4級技術認定員と認めることとした。

2. 「日本太鼓ジュニアコンクールについて」

①第6回大会の実施結果について

資料を基に報告を行った。

②第7回大会の実施について

資料を基に説明を行い了承された。

③課題曲の規定等について

課題曲の規定等について説明し資料を基に検討した。

- ・課題曲の指示テンポの厳密性

演奏時間は50秒以上1分以内を基準とし、規定違反については、技術委員が最高10点減点する。

- ・演奏方法の基準

課題曲に示された楽譜は、太鼓の種類を問わず演奏すれば可とする。

- ・演奏メンバーの変更

課題曲・自由曲のメンバー変更は、禁止する。

<運営委員会>

第21回運営委員会が7月23日(金)に開催され、「2004年度助成金交付事業の追加申請について」審議、承認された。

日本太鼓が各地で関係団体に協力

水とのふれあいin浜名湖

8月2日(月)静岡県浜名湖競艇場内に勇壮な太鼓が鳴り響きました。

この日は、(財)B&G財団が、マリンスポーツを通じて、浜名湖の自然や水に触れ親しんでもらおうと「水とのふれあいin浜名湖」を開催いたしました。約3,000人の参加者に、静岡県の「天城連峰太鼓」による元気な演奏を披露し、大きな拍手を浴びました。



(天城連峰太鼓)

水心会夏まつり

9月10日(金)東京都船の科学館にて第17回水心会夏まつりが開催され、太鼓演奏が行われました。

今回は、神奈川県こすいの「鼓粋」が演奏し、勇壮なバチさばきで大勢の競艇関係者を釘付けにしていました。演奏終了後は、盛大な拍手が送られました。



(鼓粋)

花博・コスタリカデー

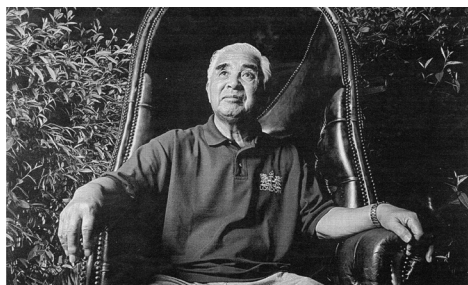
9月13日(日)静岡県浜名湖ガーデンパークで開催された「コスタリカデー」において静岡県の「富岳太鼓」が出演しました。

このイベントは、「浜名湖・花博」の一環として行われたもので、ご出席されたコスタリカ共和国サイエンス文化大臣ご夫妻から賞賛のお言葉をいただき、大勢のお客様からも盛大な拍手をいただきました。



(富岳太鼓)

各地のたより



A DIFFERENT BEAT

INTERVIEW MASTER DRUMMER DAIHACHI OGUCHI REVEALS HIS INSPIRING BLEND OF ANCIENT PERCUSSION AND MODERN JAZZ TO ALYN SHIPTON

"TAIKO drumming is a mixture of sport and art." This rather neat description of the ensemble percussion style that the Grandmaster (Daihachi) Oguchi developed in Japan 52 years ago emerges soon after our ritual formalities of introduction. A stocky, compact man, who looks younger than his 80 years, Oguchi delivers his opinions with the same directness with which he leads his Onoue Daiko ensemble on stage. His voice rumbles with a similar authority to his own taiko, which literally means "fat drum".

Behind the drums he grows even more in stature and in strength, shooting enthusiastically as he plays, and raising his arms in gestures that match a ballistic grace with a perfectly judged sense of rhythm. Although his appearance at tonight's Rhythm Stick festival on the South Bank is the climax of his first visit to Britain, the music he created has got here before

ly with drums, with none of the harmonies of Western music? "To me," he says, "Western music, with its rich harmonies and instrumental colour, is rather like oil painting. But taiko is more like the subtlety of traditional Japanese ink drawing. The brush strokes of an artist can represent everything from a fluttering leaf to a huge rock, from a translucent grey to a massive, deep black, and the taiko drum sounds are the same. I can make a tiny, subtle 'ta-ta-ta' rhythm

"TAIKO IS LIKE THE SUBTLETY OF JAPANESE INK DRAWING"

that's as delicate as a feather, or I can create a huge 'boom' that'll go straight to your heart. In a taiko ensemble, we combine these into a high form of art."

something," he says, "and this made its way into all Japanese religion, because people were grateful for the signals, and they came to believe that gods inhabited the drums. Consequently, taiko came to be played on religious festivals and only priests were allowed to play them. Soon, there were taiko in every holy place in Japan." His own interest began after the Second World War, when he was training as a jazz drummer working with guitarists and bassists. He discovered some ancient taiko notation at a sacred site and, after working it out, decided to perform it in his local Onoue shrine.

"The notation was very difficult," he recalls. "Everybody could read the title, but nobody knew any longer how to decipher the four points of the music. I had to make the written shapes correspond to notes I had heard the priests play, and I found this very inspiring. They used different sizes of drum for different events. The

with other musicians with the freedom of improvisers, gave him the idea, he says, I wondered if this development had come along at a very significant point in Japan's attempt to rebuild itself after the Second World War, with a national style of ensemble music that involved all levels of a community, yet which had honourable and ancient links to the country's past.

"I have no doubt that that is partly true," says the Grand Master, "but the real thing that spread the music was the arrival of television. In the 1950s it became available in almost every area of Japan, and because we were among the first groups to play on television people all over the country were able to imitate us. Now there are over 4,000 taiko ensembles in Japan."

Maybe it's his own style that marks out his Onoue Daiko ensemble as unique among this vast array of bands. Haven't I spotted him

小口大八副会長が、7月にイギリスにおいて、現地の太鼓チーム「影武者太鼓」と共演し、その際、地元の新聞「The Times」では紙面1ページ分に渡り記事が掲載されました。

公演は、7月16・17日イギリス・エクセターにおいて「サマーフェスティバル」が開催され、影武者太鼓5周年を記念して共演したものです。また19日には、ロンドンにおいて、世界各国からドラム奏者が一堂に集い開催された「リズムスティックスフェスティバル」でも共演しました。

10月3日に長野県諏訪市で開催いたしました「第6回日本太鼓全国障害者大会」は、お蔭様で大盛況に終了することができました。詳細につきましては、次号(会報1月号)でご報告させていただきます。

教職員太鼓研修会 順調に各地で開催中

7/31群馬県、8/5栃木県、8/27島根県、8/27・28北海道道西の各支部において教職員太鼓研修会が行なわれ、5級204名、4級31名の合計235名の教職員認定者が誕生しました。参加者からは「来年も是非参加したい」「もっと練習して子供たちに指導できるようになりたい」などの感想があり、各地とも好評です。

今後は、11月14日(日)岩手県、11月28日(日)兵庫県、静岡県、北海道道南において開催されます。